

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23091

研究課題名（和文）中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究

研究課題名（英文）The study of how the Kagaku by Kensho had been accepted by Asukaike in Early Middle Ages

研究代表者

鎌田 智恵 (Kamata, Chie)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：80844373

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、院政期から鎌倉初期に活躍した歌学者・顕昭の歌学が後代どのように受容されたかを調査した。鎌倉後期の歌人・飛鳥井雅有は顕昭の著作をまとめて書写し、実際にその説に学んだことが知られる人物である。一方で、彼の和歌には顕昭説の影響を明確には指摘しえない。彼の場合、顕昭の歌学の受容という点では研究と実作との間に距離がある。顕昭の歌学は、研究面において、彼が主として学んだ御子左家説を相対化する役割を果たしたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、飛鳥井雅有における顕昭の歌学の受容について、彼の活動と和歌作品の両面から実態を明らかにすることを目指した。雅有は顕昭の歌学書を書写しそれらに学んでいたという事実がある一方で、彼が詠んだ和歌からは顕昭説からの確かな影響を指摘することが難しい。研究活動や知識の習得が必ずしも実作に直結するわけではないことを改めて確認した点に、意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have researched how the Kagaku by Kensho, an influential waka poet and scholar from the late Heian period to early Kamakura period, had been accepted by later generation. Asukai Masaari, a waka poet in the late Kamakura period, transcribed Kensho's works and learned from them. However, Masaari's waka poems don't show evident influence of Kensho. In his case, in terms of the reception of the Kensho's kagaku, there was a gap between study and practice. For Masaari, the reception is thought to have played a role in relativizing the teaching of Mikohidarike that had formed his basic understandings of waka.

研究分野：中古・中世の歌学の研究

キーワード：歌学 六条藤家 顕昭 飛鳥井雅有

1. 研究開始当初の背景

院政期を代表する歌道家の一つである六条藤家の人物に、顕昭(1130頃 - 1210以降)がいる。顕昭は歌集や歌語の注釈において合理的・実証的な考証に取り組み、その成果は中世以来、高く評価されてきた。著作も多くの人々に読まれ、また書写も多くなされてきた。しかし、直接の継承者を持たなかったためか、歌学史におけるその重要性に反して、彼の歌学の後代的な受容の実態はあまり明らかにされてこなかった。

鎌倉後期の歌人である飛鳥井雅有(1241 - 1301)は、顕昭とは対立関係にあった御子左派の流れを汲んでいる。しかし、彼は顕昭の著作を書写し現在に伝えた人物であり、歌道家としての飛鳥井家の基盤を整えた子孫の雅縁も、顕昭の著作を書写している。つまり、同家においては顕昭の歌学が継続的に受容されていた事実が確認される。このことから、同家の歌学の形成に、顕昭の歌学が何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。そこで、雅有らの作品の分析や、歌書・歌学書の収集活動の調査に取り組むことで、顕昭の著作が後代、飛鳥井家においてどのように受容されたかを具体的に明らかにできるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、顕昭の歌学が後代どのように受容されたのか、その実態を明らかにすることにある。中世の新興の歌道家である飛鳥井家の人々、主に飛鳥井雅有の作品や活動を対象とした調査研究を行い、顕昭の著作の受容の実態を、具体的に明らかにする。

3. 研究の方法

初めに、顕昭著作の伝来過程や飛鳥井雅有の事績の調査、およびその整理を行った。それを踏まえ、以降、顕昭の歌学が雅有に及ぼした影響についての調査に移った。具体的には、彼の和歌・日記作品を対象に、何らかの歌学知識に基づくと思われる内容・記述を抜き出し、顕昭およびその周辺の歌学説との影響関係について考察した。

4. 研究成果

顕昭の歌学と飛鳥井雅有との関係について、次の2つの事実がまず注目される。

- ・ 雅有の日記文学作品である『春の深山路』(弘安3年)の記事に、顕昭の『古今集序注』が登場する
- ・ 雅有は弘安5年に『古今集序注』『古今集注』以下、現存する5つの勅撰集注釈書を書写した
- ・ 雅有の識語を有するこれらの注釈書は中世末に伏見宮家にまとまって伝わっていた

これらの事実から、雅有が顕昭の著作に学んでいたことは明らかである。また、彼のそうした活動が、伏見天皇を経由して、顕昭の著作の伝来に結果的に大きく寄与したらしいことも窺える。そこで、本研究では、『春の深山路』の記述および雅有の和歌を調査することで、顕昭の歌学が具体的にどのように受容され、それが彼の歌人としての活動にどのような影響を及ぼしていた

かを探った。

(1) 歌語「そとも」の典拠に関する知識について

『春の深山路』7月6日の記事に、京極為兼に歌語「そとも」の典拠を問うてみるよう東宮(熙仁親王、後の伏見天皇)に勧める場面がある。「そとも」は平安時代以来、「(家などの)外」の意で用いられてきた歌語であるが、典拠にあたる『日本書紀』成務紀によれば、本来は「北」の意を含んでいた。雅有には「北側」を意味する「そとも」を詠んだ歌(雅有集・404)があり、従来同記事との関係が注目されてきた(濱口博章「そとも」考、『姫路獨協大学外国語学部紀要』5、1992年)。ここで生じる疑問は、「そとも」が『日本書紀』に典拠をもつ語であるということ、彼が何によって知ったかである。

雅有以前に歌語「そとも」に注目し、典拠にまで言及した人物は顕昭と仙覚である。顕昭は詳細な歌語注釈書である『袖中抄』で、仙覚は最初の万葉注釈である『万葉集註釈』にてこの語に注を施した。

雅有は父・教定とともに関東伺候の臣で、宗尊親王に仕えていた。また、親王が將軍を廃された後、熙仁親王(後の伏見天皇)の侍従となり、京と鎌倉を往来した。京と鎌倉、どちらの人脈をとっても、彼は両書入手できる環境にあったと考えられる。また、彼は顕昭の著作を多く書写したが、『袖中抄』を書写した事実は知られていない。いずれを参照して「そとも」の知見を得たのかは不明である。次の(2)とあわせて、今後も調査を継続してゆきたい。

(2) 雅有の和歌における顕昭の歌学の影響について

雅有が詠んだ和歌に顕昭の歌学の影響が見られないかを調査した。その結果、顕昭説に学んだことを確実に指摘できる例は見当たらなかった。しかし、顕昭からの影響を全く否定することもできない。たとえば、彼には「ともかがみ」を詠んだ歌が2首残る(隣女集・二・597、雅有集・185)。「ともかがみ」は紀貫之(後撰集・冬・473など)以降、雅有に至るまで詠まれたことがなかった非常に珍しい歌語である。歌学書では『袖中抄』のみがこの語を取り上げており、そこから関心をもった可能性が一応指摘できる。しかし、貫之歌に直接学んだ可能性も否定することはできない。

このように和歌の調査を通しては、顕昭の歌学からの影響は、あくまで可能性を指摘しうるというに止まる。この問題については今後も調査をより精しく行う必要性を感じているが、現段階での見解を述べれば、雅有の和歌に顕昭の歌学からの直接的な影響を指摘するのは難しい。顕昭説の受容はあくまで研究や知識収集のためのそれであり、実作とは区別して考えるべきであろう。

(3) 和歌の難義の収集と顕昭の勅撰集の注釈書

『春の深山路』の記事によれば、(1)の「そとも」に関するやりとりに端を発して、雅有は熙仁親王に内々に『古今集』を進講することになった。そして更に数日後、東宮の支持を得て、『古今集』等歴代の勅撰和歌集に見える和歌の難義を収集した書物を用意した。『古今和歌集』の注釈を除けば、当時、勅撰集を対象とした注釈書は多くなく、その中で最も内容が精しかったのが顕昭の注釈である。難義の収集作業においてはこれらが大いに参照されたはずで、雅有は以前からこれらの注釈書に学んでいたと考えるのが自然である。

なお、これらの注釈書に残る雅有の識語はいずれも弘安5年のもので、弘安3年になされた和歌の難義より後に書写されている。弘安5年の雅有識語をもつ本は、『詞花集注』の室町時代に

記された別の識語によれば、伏見宮家に伝わっていた。外題は伏見天皇の勅筆であったとも記されている。これらの事実から推測するに、弘安3年の難義収集の後、顯昭の勅撰集の注釈書はまとめて伏見天皇に献上された。それが結果的に、今日までそれらの注釈書を伝えることになったと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------